
タマゴ奮闘中！

湖真子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タマゴ奮闘中！

【Nコード】

N3124K

【作者名】

湖真子

【あらすじ】

人間と地球外生命体との間に生まれた子。外見は3〜4歳児。中身は？？？ママが大好きな雨中鉄3ヶ月。大好きなママをめぐつて、今日もパパと戦います！そんな鉄くんの成長と困難をこらんあれ。

まず始めに（前書き）

現代ファンタジーです。・・・頑張ります。

まず始めに

普通って何だろう？

僕の世界はとても狭い。

その中から日常として繰り広げていれば普通って言ってもいいのかな？

・・・やっぱ無茶だよな。

そもそも僕の存在自体が普通じゃない。

ママは人間。でもパパはその人間からかけ離れてるんだ。

地球外生命体と呼ばれるものだと思う。

けど、パパに聴くと

「僕の曾祖父からここに（地球）に棲んで300年以上は経ってる筈だから地球人でも良いと思うよ？外見も食事も差ほど変わらないんだから♪」

・・・。

曾祖父の代からで300年以上経って・・・。

きっと考えるだけ無駄なんだろうなあ・・・。

話は変わるけどパパはママを溺愛してる。

本当に何処かに行って欲しいと思うくらい。

そして僕もママが大好き！！！！

きっとパパの遺伝子が濃いんだと思う。

そして今日もパパと僕との戦いが始まるんだ！！！！
負けないからね！パパ！！！！

まず始めに（後書き）

昔書いた話を手直したものです。
父VS息子。勝者は誰の手に????

「あいさつ」

僕の名前は雨^{アマナ}中^{ナカ}鉄^{マカネ}。

ちよつと癖のあるやや茶色な髪。

つり眼がかつた瞳はパツチリと大きくまるで子猫のようだと近所のオバサマから人気。

・・・喜んでいいのか分かんないけどね。

外見は3〜4歳だから可愛いと母性本能をくすぐられる外見だと思うよ。

嫌われるよりはいいけどね。

ライバルのパパに似ているのが嫌だけど！

でも・・・

「るぅ〜いい？」

あつ・・・ママの名前だよ。

正確には雨^{アマナ}中^{ナカ}瑠^ル衣^イ。

そう言つて四六時中ママにべつたりなパパを見ているとママに似ちやつてたらパパに溺愛されてたのかな？？

うげええええ〜

凄く嫌過ぎるよ！！！！

とりあえず、僕とパパは朝から戦うんだ。

太陽の光がカーテンの隙間から入ってくる爽やかな朝。ただど熱き戦いを今日も繰り広げる！

「「じゃんけんぽいつ！」「」」

真剣な勝負。どちらも譲る気はない！
だって、勝った者がママに一番に＜おはよつのキス＞が出来るんだ
よ？

絶対に負けられない！！！！

「「あいこでしょっ！！！！」」

本日25回目のあいこ。

次で決める！！

「「あいこでしょっ！！！！」」

パパはぐー。僕はぱー。

やった！！！！思わずガッツポーズ！！

「やったー！！！！僕の勝ちv」

嬉しくってびよんぴよんと、飛び跳ねながらベッドを降りた。

「お早う・・・朝から元気ね・・・」

ママは牛乳をコップに注いでいた。

リビングルームにあるテーブルで毎朝僕達は朝食をとる。

「ママーvお早う！！」

僕はママの元へ勢いよく飛びついた。

「あっ・・・」

勢いよすぎて床に倒れちゃった。その拍子にコップが落ちてきた。
でも、気にしない。コップはプラスチックだし、怪我する心配は無
いもん！

だから、おはよつのキスが先！！

「ママ！！今日は僕が勝ったの！！」

牛乳が掛かっても気にしないで僕はママのほっぺにチューをした。

「お早う・・・ちゅっv」

「お早う、鉄」

「はい時間切れ！さっさと離れる！！！」

パパが僕からママを離す。

嫉妬メラメラ。本当に大人気ない！！

もう少し抱きついてたっていいじゃん！！！！

「ママ・・・牛乳掛かっちゃってごめんなさい・・・」

ママから離されると、ママの髪と洋服が牛乳で濡れていたことに気が付いた。

父に抱えられたまま、僕はママに謝った。

「大丈夫だから気にしないの！・・・それよりも危ないでしょ？
怪我は無い？」

ママは僕の頭をぐりぐりと撫ぜる。

「ごめんなさい・・・怪我は無いです」

「そう・・・パパ、私と鉄は風呂入るから・・・ココ頼んでもいいかしら？」

「っ！」

「二人して牛乳かぶっちゃったし・・・何で嫌そうな顔するの？」
ママは首を傾げつつも二人分の着替えを取りに寝室へ行った。

ふふふふふふ・・・？

思わず笑みがこぼれた。

「・・・今日のキス【みるく】の味がした・・・v」

「鉄・・・（怒）」

この瞬間、パパに全てがばれた。わざとばらしたんだけど。

これでママと二人っきりの入浴が出来る！！！！

やったね！！

「おろしてよ!!」

しまった!ばらすのが早かったかも!!

パパが下ろしてくれない!!!!

「パパ!!」

「・・・ふふふふふふ」

なっ・・・何?

僕を抱きかかえたまま不機嫌なオーラを出していたパパのオーラが変わった。紫が混じったマールブルカラー色に。気持ち悪いよ!!!!
怖い!!!!何か企んでる!!!!

「いやああああ!!!!放せ!!!!!!」

あまりの不気味さに暴れた。

怖いよ!!!

大人のパパに必死に抵抗しても体は子供。
暴れても離れない。

「パパの変態!!!!!!ママ!!!!」

「っ!何やってるのよ!パパ!!」

寝室からママが驚いて戻ってきた。

「まあまあ・・・」

普段はめったに泣かない。かつこ悪いから。

でも、パパが不気味すぎて半泣きだよ。

うううう・・・怖いよ。

「・・・パパも風呂行きね」

パパから僕を奪い、抱きしめたママが溜息混じりに言う。

僕が暴れた所為で、パパの身体も牛乳まみれになっていた。

「っ!」

この瞬間、僕はパパの作戦にまんまと嵌った事を悟った。

せっかく二人で入れる筈だったのに自分の手で二人から三人にして

しまった。

悔しいー!!!

朝の戦いは・・・父親の勝ち・・・???

電話

今日は平日。

ママとパパは仕事。

広々としたリビングに鳴り響く電話の音。

「はい？」

ディスプレイの表示で、ママからの電話だと分かってウキウキな僕。

『残念〜！』

受話器から僕の大嫌いなパパの声がした！

しかもクスクス笑ってやがる…。

くそー

僕が引つかかったのがそんなに楽しいのか！

「…何でママの電話使ってるの？」

『目に付いたから』

さらっと言ったよこの人！！

…切ろう。

きつと用事はないんだよこの人。暇だからとかそんな理由なんだよきつと。

『だって鉄、僕だって分かると出ないでしょ？』

当たり前だい！

「…で何のよう？」

『瑠衣が忘れ物取りに今そっちに向かってるよ！』

「ほっ本当に？！」

ママに会える♪

『嘘〜♪』

「…」

このくそじいー…

暇だからって僕で遊ばないでよ！！

性質が悪い！

がっちゃん！

僕は受話器を叩きつけて電話を切った。

⌈
:
⌋

本当に何がしたいんだろう……あのクソじじい……！！

念の為、電話を留守電に変更。

案の定再びかかってきた。

『あれー？留守電に変更してる……クスクス』

鐵

⌈
•
•
•
•
⌋

僕は無視して、電話の音が聞こえない部屋で昼寝をする事にした。

約1時間の昼寝。

リビングに戻って留守番電話を確認。

もし、ママのが入ってたら……と思うと確認は怠れない。

『ピー25件です』

•

頑張って聞いたのに全てパパだった。

⌈
•
•
•
•
⌋

仕事しろよ!!!

電話（後書き）

とある事情により鉄君は保育所にいつてません。

電話 2（前書き）

電話 2 ですが電話が鳴ったりしません。続きです。

電話 2

今日はパパからの悪戯電話にぐったりな僕。

「はうあゝあ」

電話機の前でぐったりしていると曾ばあちゃんが起きてきた。真っ黒な肩までの髪。ちよっと釣り眼がかった目は僕と同じ。150cmない小柄な体。ぱっと見た目は日本人形。でも、着ている服がピンク色のジャージ。

曾ばあちゃん、今年98歳じゃなかったけ？

「良く寝たわい。なんじゃ、電話でもあったのか？」

「・・・うん」

両親が働いている間は、曾ばあちゃんの家に預けられる。

家の主は18時に就寝しているにもかかわらず、起床は13時。
・・・。

保護者の意味がないって言うかなんと言うか・・・。
何のために僕預けられてるんだろう???

「春斗からじゃろ？」

春斗は僕のパパの名前。

「うん・・・何で分かるの？」

すごい！

「・・・鉄が疲れるほど電話してくるのは春斗しかおらんからな。腹減ったか？」

「・・・」

パパ・・・昔も同じ事したんだね・・・。

ピンポン

玄関のチャイムが鳴った。

「何じゃ???・・・昼飯はちよつと待ってな」

そう言つて玄関先へ向かう曾ばあちゃん。

「何でしょう?」

ガチャ

曾ばあちゃんはドアを開けて対応。

のぞき穴とか、カメラ付のインターホンを無視つて所が曾ばあちゃんだ。

強盗だつたらどうするんだろう??

「英会話教本の・・・あら?」

英会話関係の営業らしい人が曾ばあちゃんを見て表情を変えた。

「お父さんか、お母さんはいらっしゃいますか?」

子どもに見せる笑顔と猫なで声だ。

営業のお姉さん、目の前に立っている人はお姉さんの3倍以上は確実に生きている人だよ?

「・・・いないな。」

居たら怖い。何百歳だよ!って感じだよな。

でも、お姉さんが悪いんじゃないよ????

だつて曾ばあちゃん・・・。

外見が15歳!!!

ありえない!!!

シワ知らずのぴっちり肌の肌!!!

髪は天然で真っ黒！

「あら、じゃあ又来ますね」

そう言ってお姉さんは去っていった。

「昼飯にするか？」

「うん」

曾ばあちゃんの血が濃くありませんように密かに願っている僕だったりする。

せめてパパぐらいは成長したい。

……ママに会いたいな。

電話2（後書き）

雨中家の曾ばあちゃん登場！！

地球外生命体の血が濃いぶん未成年の姿のまま成長が止まった模様。

調理中（前書き）

曾ばあちゃんの手料理です。

調理中

音だけで繰り広げられる。

調理中の音。

……の、はず。

『ぐぎゃあああああああああつ！！！！！！！！』

ががががががががが！！！

「ふっふっふん」

曾ばあちゃんの鼻歌。

ポッコン！

へごへごッ！！！！！

……変なモノが聞こえる。

気のせいじゃなかったら『ぐぎゃあああああああああああつ！！！！！！』

！』は悲鳴だよね？？

何で？

曾ばあちゃん、

「今から作るからな！楽しみにして待ってるんじゃないぞ？」

って言って鼻歌を歌いながら作り始めた。

曾ばあちゃんのお家は、台所と居間の間に曇りガラスの引き戸がある。

たぶん、枠は木材。上のほうで障子の様になっていて、枠の中を紙の代わりに曇りガラスがはめられている。下のほうは木の凹凸で描かれた梅の花の模様。

上品なつくり。

だけど、その引き戸は僕の力ではピクリとも動かない。

見た目は玄関のドアよりも軽そうなのに！！！！

鍵だって付いてない。

なのに動かない。

しつかりと閉められた引き戸。

おかげで僕は居間でおとなしく、子供用の椅子に座って待つ事しか出来ない。

その結果、音によって調理の状態を知る事が！

うん、色々と想像しちゃうよ……。

怖い方に。

「……………」

今、作っているものは料理のはず。

なのに何で悲鳴とか硬い塊がぶつかる音とか、物を殴ってる音が聞こえるの？

……僕以外の人が聞いたら調理にふさわしい音だといふのかな？
分かんない！！！！

調理を始めて10分。

包丁の「トトトントンッ」って言う音とか、「じゅうう」って炒め

ている音は一切しない。
意味不明な音ばかり。

悪いけど曾ばあちゃん、スツゴク不安。

台所と居間を遮る曇りガラスが嫌いになりそう。

台所を見たいよ!!!

気になる〜!!!

「・・・曾ばあちゃん・・・僕、お手伝いしたいなあ〜・・・」
気になってしかたがない。

僕の口にも入るものだし・・・確かめておきたい!!

僕は勢い良く立ち上がると扉の方へ向かった。

「お？そうか？じゃあ、テーブルの上を拭いといっておくれ」

そう言つて、曾ばあちゃんは台所と茶の間を遮つてる扉を足で開けた。

「足？」

「ああ・・・今、手が離せないんでな。行儀が悪くても許しておくれ？」

足の幅だけ開けられた扉。

その隙間から、台ふきんが投げ込まれた。

「うわっ！」

台ふきんは僕の頭の上を通り、丁度僕専用の椅子があるテーブルの前に着地した。

ナイスコントロール。

・・・僕が座っていればだけど。

「あつ・・・」

曾ばあちゃんの足と、台ふきんに気をとられている間に扉は閉めら

れた。

しまった！！！！

調理中の品物が見れなかった！！

僕の力ではこの扉を開けることが出来ないのに！！

チャンス逃した僕はがつくりと肩を落とした。

「ああ……」

こうなったら、テーブルをさっさと拭いて次の手伝いを催促しよう！！

拭き始めて気付いたんだけど……

テーブルを拭く為には椅子を踏み台代わりにしないと届かない。

拭いては椅子を動かす。

テーブルの周りを一周する事に！！！！

頑張るぞ！！！！

ガラッ！

「お、有難うな鉄！綺麗だ。昼飯できたぞ！」

「……………」

最後のひと拭きの最中に曾ばあちゃんが引き戸を開けてやってきた。

手には調理済みの料理を持って。

「……………」

「良い時間つぶしになったようじゃな」

「……………どうやら、わざと時間のかかるテーブル拭きを頼んだらしい……………」

こうして、僕の「調理中を見る事」は叶わなかった。

調理中（後書き）

鉄君は知能が高いので、忘れそうになります。が身体は3〜4歳です。歳は3ヶ月。スーパー赤ちゃん！！

スーパー赤ちゃんでも、テーブル拭きは結構大変な仕事です（笑）

昼ご飯

曾ばあちゃんが作った昼ご飯はゲテモノじゃなかった。

・・・うん。

だって、調理中の音を聞いたら・・・食べ物想像が出来ない。
曾ばあちゃんの持つ、茶色の丸いお盆の上に味噌汁とご飯とおかず
が乗っかっていた。

ご飯はお茶漬け。白いご飯の上に魚の身をほぐしたものと、細かく
刻んだ葱が乗っかっていて、そこに、お湯が注がれている。
味噌汁はわかめとキャベツ。

おかずは大根とにんじんの煮物。

いつ、包丁を使ったの?!

焼いてる音とか聞こえなかったよ?!

僕はすつごく驚いた。

大きく眼を開いて驚いている僕の顔を見て、曾ばあちゃんが嬉しそうに笑い出す。

「フフフフ・・・。どうやら楽しんでくれたようじゃな」

そう言いながらテーブルの上に配膳する。

その時、僕は調理中の音がわざとだと言う事に気が付いた!

作りに行く前に言った「楽しみにして待ってるんじゃぞ?」は、「
音を聞いて何を作っているか当ててみる?」と、言う意味だったら
しい。

やられた。

流石曾ばあちゃん!!!!

「音あてゲームは楽しかったか？」

「・・・疲れたよ・・・」

「フフフフ・・・。次は頑張るのじゃぞ？」

ぐりぐりと頭を撫でられた。

「・・・」

いえ。

出来れば普通に作って欲しいなあ・・・曾ばあちゃん。

きっとその願いは叶わないんだろっけど。

思わず願っちゃうよ！！

「じゃ、食べるかの？」

「いただきます」

スプーンを使ってお茶漬けを食べる。

お湯は昆布のおだしに少し塩で味が調えてある。

綺麗に骨が除かれた魚の身と良く合う！！

スツゴク美味しいよ！！！！

「子どもにはハンバーグの方が好まれるが・・・」

「？」

「美味しそうに食べるな？」

「ほへひょうほん！！！！」

美味しいもん！！！！と、言いたかった。

僕の口の中にはご飯が入ってたので言えなかった。

もぐもぐもぐもぐ

ごっくん！

良く嚙んで飲み込んでからもう一度言い直した。

「美味しいもん！！！」

「それは良かった。」

嬉しそうに曾ばあちゃんは笑う。

僕の為に魚の骨を取り除き、お茶漬けにしたご飯。
スプーンですくえる大きさに刻まれた味噌汁の具。
僕の口に入れやすい大きさの煮物。

大人にはやや薄味な味付けは僕には丁度いい。

僕の為に作ってくれた「お昼ご飯」はとても美味しい。

うん。

幸せだ。

お迎え

時計は4時半を指す。

両親が帰ってくるのは6時頃！！

まだかなあゝ！

明るかった空は日が落ち、暗くなる。

そうになると、僕達は部屋のカーテンを閉める。

「鉄^{まがね}ゝ！向こう側のカーテン閉めてくれ」

「はい！」

僕は元気良く返事をする。カーテンの端っこを掴んで引く。張る。引く。張った時の音が僕は好き。

何故かワクワクするんだ！！

曾ばあちゃんはその分かってるから僕の届かない高さのカーテンだけを閉めていく。

ピンポーン ♪

リビングの奥のカーテンを閉めているとチャイムが鳴った！！
ママ？

と、思ったけどまだ時計は5時を指したばかり。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン
ポンピンポーン ♪

連続で鳴らされるチャイムの音。

鳴らしすぎだよ！！

誰だよ！

そんな事を思つてると、

「鉄、帰つてきたようじゃぞ?」

と、曾ばあちゃんが言う。

「え?!」

「あんな阿呆な鳴らし方は春斗しかおらんよ・・・そのうちふざけた鳴らし方になるぞ?」

ピピピピンポーーンピンポーン♪

ピピピピンポーーンピーーンポオooooooooン♪

本当だ!

僕は走つて玄関へ向かった。

パパが来たつて事はママも来たつて事だ!!!

「おかえりなさい!!!」

僕はドアが開くとママに跳びついた!

「げっ!」

が、パパが素早い動きでママの間に入る。

「鉄♪たたいまあ♪」

僕はパパに抱きしめられた!!

お帰りなさいのハグぐらいさせてよ!!!

僕はじたばた暴れていると

「・・・ずるい」

と、ポツリとママが言った。

「ママも鉄抱っこさせて?」

「駄目」

驚いた。

ママ????

僕がママに抱きつくのをパパが邪魔するのは毎日の事。

ママはそれを見て、苦笑いする。

それが今日は……

「パパの意地悪……ママも鉄を抱っこしたいのに……！」
嬉しいよおおお……！！！！

抱っこして……ママ？

「だ・め」

パパは僕を放そうとしない。

するとママ、拗ねた。

「パパの意地悪」

僕もママに抱っこされたい……！！

「……そうだ……！」

ママは何かを思いついたらしい。

ぎゅっ！

「？」

僕の背中が温かくなった。

僕の前はパパ。

「フッフ……？瑠衣が目の前に居る」

「パパが鉄を放してくれないんだもの。パパごとぎゅう」

僕の背中からパパごと抱きしめているみたいだ……！！

「……瑠衣……」

抱きしめられてる所為でパパの囁きが聞こえた。

「可愛い」って……

「えっ？ちよっパパ……んう……」

ちよっ……！！

僕を挟んで何やってるの……？！

何気にパパは僕の口を塞いでるし……！！

キスしてるでしょう……？！

パパの阿呆……！！

パンパン！

「っっっ！」「っ」

手のひらを叩く音が響く。

「玄関先で何をしているのだ？・・・近所迷惑じゃ。早く入れ」

僕達が入ってこないのを不思議に思った曾ばあちゃんが様子を見に来た。

「えっあつその・・・」

背中の温もりが消えると共にママの声。

パパから解放されたらしい。

「溜衣真っ赤っ」

「パパ！！」

「・・・早く入れ・・・」

曾ばあちゃんの2回目の「早く入れ」は、とても低い声だった・・・。

怖っ！！！！

お話

3人で曾ばあちゃんに謝った後、おとなしく家に上がった。リビングに行って座るとママがお茶を入れた。

「・・・今日は帰りが早いな？」

曾ばあちゃんは話があるんだろ？つと、パパの方を見た。

「流石！絹恵ばあちゃん♪」

パパはニコニコ笑う。

「会社の方で話が付いたんだ」

そうパパが話し出すとママはパパの隣に腰をかけた。

「鉄を預かってくれて、有難うございました」

深々と頭を下げる両親。

「・・・良かったな」

「色々と手を回すのに5日もかかったわ」

「脅しはほどほどにしとけ」

えーと。

つまり、明日から昼間もママと一緒に仕事？？

やった！！！

「曾ばあちゃん！色々お世話になりました！有難うございます！！」

！

あいさつ・お礼はきちんとしないとね！

僕がお礼を言つと、曾ばあちゃんは僕の頭を撫でた。

「・・・いい子じゃ。たまに遊びに来るんじゃぞ？」

「うん！」

「じゃ、今日は鉄お泊り」

「えっ？」

パパの一言に驚くママと僕。

「瑠衣と久しぶりにラブリン？」

「・・・」

「邪魔は許さないからね?」

「.....」

眼がヤバイ。

こう言う時のパパは容赦がない。

「.....ママもお泊りしたいな」

逃げ腰のママ。

「ココで襲うよ?」

そう言ってパパは、僕や曾ばあちゃんの目の前でママを押し倒した。
「っ!!!!」

「やっぱり初めはキスからだよね?フッフ.....身内に見られながらSEXするのって興奮するよね」

「やめっ!んん」

質問です。

どうやってママを助けたら良いんですか??

答え、曾ばあちゃんが止める。

「馬鹿もん。二度も見たくも無いものを見せるな!!!!鉄と瑠衣ちゃん
は泊める。お前は自宅へ帰れ!!!」

バコンッ!!!!

曾ばあちゃんは容赦なくお盆の角でパパの頭をぶん殴る。

「春斗.....5秒待ってやる」

「じゃっ!帰るね!」

曾ばあちゃんが数え始めるとパパは慌てて玄関の方へ向かった。

曾ばあちゃん凄い!!!

あのパパがママから離れた!!!

「.....曾ばあちゃんカッコイイ.....」

僕が曾ばあちゃんのファンになったのは言うまでもない。

お話（後書き）

曾ばあちゃんは最強です。
パパさんは変態です（笑）

お泊り（前書き）

パパが居ません！

ママの独り占めです！！

今回はお留守番のご褒美と言つて……。

お泊り

パパが居ない！！

邪魔者が居ない！！！！

久しぶりにママを独占できるかと思うと嬉しくってしかたがない。

顔がにやけてるきつと！！

やった〜

「〜」

思わず踊ってしまう。

その様子を見ていた曾ばあちゃんとママが「可愛い」と思っていたなんて僕は知らなかった。

だからじつと見ていることが分かった瞬間、僕は恥ずかしくなった

！！！！

み・・・見られてた！！！！

きつと僕の顔は真っ赤。

その証拠に顔が熱い。

どうしよう？どうしよう？

こんな時、パパが僕をからかうので僕は恥ずかしかった事も忘れる。パパに対する怒りが募るから。

でも、今日はパパが居ない。

どうやって誤魔化せばいいの？！

にこっ

僕は二人に向かって微笑んだ。

日本人特有の「笑って誤魔化す」と言うやつ。

「鉄〜」

二人に抱きしめられた。

何で？？？

「????」

訳が分からないけど二人の温もりは暖かい。

えへへ♪

たぶん僕の顔はしまらないほどにゆるんでる。

その顔を見た曾ばあちゃんはおくのをぐりぐりと撫ぜる。

「そのまま育つんじやよ」

つと言つて、僕達の寝る場所を用意する為に立ち去る曾ばあちゃん。
意味分かんないよ??

「????」

「ふふっ」

ママあつたかい。

気持ちいいな♪

ママの心臓の音が聞こえる……。

とくん……とくん……

とくん……とくん……

とくん……とくん……

「すう……」

「……あれ?鉄寝ちやつたの?」

いつしか僕は夢の中へ!

勿体無いよ僕!!

邪魔者がいなかったのにいいいいいい!!!!!!

……睡魔に負けた……。

おはよう

「ん」

暖かいお日様の光が、カーテンの隙間から入ってくる。
徐々に目が覚めていく僕の頭。

暖かい……。どうやら布団の中のように。

「……朝？」

朝だと分かった瞬間、僕は落ち込んだ。

ママに抱きしめられた後、直ぐに寝てしまった事に気付いたから！！

勿体無い。

勿体無いお化けが出るよ！！！！

ママとの夕飯、お風呂、絵本読み！！！！

でも、ママに抱きしめられながら寝れたから良しとしよう。

うん。パパが居たら無理だもんね！

僕の隣にママの寝ている顔が見える。

ママの寝顔だあ

抱きつこうとした僕。

「？」

あれ？

あれあれ？？？

体が動かないよ！！

何かが僕の身体に巻きついてる？

もがいてもビクともしない。

何だろう？っと、思った僕は唯一動く首を動かしてみた。

見えない。

布団が邪魔で見えない。

「……？ああ……。鉄？起きたの？」

僕がもがいていた振動？で、どうやらママの目が覚めたみたい。
ごめんなさい。

起こすつもり無かったんだよ!!

「おはよう・・・???」

「おようママ?」

起き上がったママは、動かない僕を見て不思議そうな顔をする。

「どうしたの?」

「動けない・・・」

「え?」

ママは僕にかかっている掛け布団をめくった。

「・・・」

「?」

「可愛い!!!卵?卵の着ぐるみ着てるの?」

「何を騒いで・・・ああ・・・可愛いでしょ?」

ママの声に起きたパパ。

・・・

パパ?!!!

「どういうこと???」

「絹恵ばあちゃんは寝たら最低13時間は起きないからね」寝たらこっちのもの」

・・・曾ばあちゃんが寝るの待ってから侵入したんだ・・・パパ。慣れてるね・・・パパ。

ここに居る理由は分かったけど・・・。

何で僕が着ぐるみ着てるの???

「鉄も一度寝たら起きないからね」着せてみた!」

「パパ!良い仕事するね!」

うつきうきのママは携帯電話で僕を撮る。

「・・・もしかして手作り?」

「当たり前」

やっぱり・・・。

僕はどんな格好してるの??

「鉄が生まれた時の事思い出すね!・・・鉄、見る?」

「うん!!」

ママに見せられた携帯の画面には今の僕の姿が映っている。
白い真丸の卵。卵の上だけ僕の顔が出て、しかも殻の形した枕がある。

「鉄可愛い?」

そう言っただけママは僕をぎゅーと、抱きしめた。

「パパ最高!!!」

そう言っただけパパをぎゅーと、抱きしめたママ。

「・・・」

きっとパパは新作を作るんだろうな・・・。

そして、僕も文句言っただけ着る。

ママが喜ぶから。

とりあえず、

「パパ、手足出るもの希望」

今のうち希望を言わないとね!

この手足の出ない形の理由がアレの気がする。

・・・とか思ってたなら、案の定。

パパが!!!

「ふふふふふ・・・。瑠衣おはよう?」

ちゅっ!

つとママの頬つぺたにキスをした!!!

「!ちゅっ!!!お早うのキスはじゃんけんで決めるんでしょ?!!」

パパずるい!!!

「え?鉄じゃんけん出来ないでしょ?」

「出来なくさせたのはパパでしょ!!!」

やっぱり、手足が出なくてある理由はそれだった!!!

パパと言っているママが僕に近づいて、

「鉄」

ちゅっ!

「・・・・・・・・」

ママが僕の頬つぺたにキスをした！！！！
わーい！！

「瑠衣！！？？」

「パパなんか知りませーん」

ママは僕を抱き上げる。

「子供とのルールを破るパパはそこで反省してね？」

「・・・・・・・・」

ショックを受けたパパの顔。

ママは一度も振り向かず部屋を出た。

「・・・・・・・・」

ルール破りは恐ろしい事を僕はパパの姿を見て悟った。

おはよう(後書き)

久しぶりに書いた所為か・・・おかしな事に。
ママってどんな性格なのよ？

反省（前書き）

・・・主張？痴話喧嘩？
・・・そんな感じです。

反省

ドアが閉まって5秒後、ドアが開かれた。

「っ！」

そして、走って僕達の前に立つパパ。

もしかして・・・5秒間反省した、とか言わないよね？？

でも・・・パパである。

凄く有りえそうで・・・嫌だ。

その証拠にすごい笑顔のパパ。

「僕は溜衣の前で誓う！鉄が5歳になるまでは、朝のじゃんけんは正々堂々と勝負すると・・・！！」

パパは拳を天井に向ける。

意味分かんないから！

その言葉が嬉しかったのか、ママはウルウルした顔をパパに向ける。

え？ママ？？

「パパ・・・」

ちよつと待つてよ！！！！

感動したよ・・・って感じの声は可笑しいよ！ママ！！

・・・それにパパ、僕が5歳になったら何するつもりなの？！

「・・・と、僕は反省したので溜衣！」

「え？んん——」

パパがママにキスをする。

何で？

そう言う雰囲気じゃなかったよね？

ここでキスなの？

僕、今ママに抱っこされている状態なんだけど！

今日も僕を挟んだ状態でキス？

このクソ親父！！！！

「ちよつふがふが——っ！！！！」

僕の声はパパの手によって塞がれる。

この着ぐるみ本当に嫌だ！

暴れる事も出来ないし！

この状態で両親のラブシーンって、ママからの「ほっぺにチュー」を根に持つてるでしょ！

長い~~~~っ!!!

「.....はあ.....」

やっつっつと放れた。

何とは言わないけど!!

ママは腰が抜けたらしく、ズルズルと崩れて床に座る。

「ママ？大丈夫？」

「.....っ!!」

僕がママに声をかけた瞬間、ママの顔は真っ赤になる。

僕が声をかけた事によって今までしていた事を意識したみたい。

「パパパパ.....」

「瑠衣どうしたの？」

「パパ何で!! ままっま鉄の.....」

「ん？両親が仲良しって事でしょ~~~~それに、瑠衣にはお仕置き」

「え？何で!!」

「瑠衣からのキスは僕だけのものでは!! 何で鉄にするの？僕の前で浮気？」

「鉄は息子!!」

「だから何？むしろ血が繋がってるから僕よりも近い存在でしょ？」

「~~~~ずるい。僕と同じ顔なのに!!」

パパ.....変だよ。

本気で言っている所が怖い。

僕はママに恋愛とか近親相姦は絶対にありえないから！

パパの主張はまだ続く。

「僕と同じ顔なのに鉄ばかりに!!」

「……………」

呆れていいですか？

「鉄は……………」

「子供だつて言いたいんでしょ？分かつてるよ。」

「……………パパは鉄が可愛くないの？」

「可愛いよ。当たり前でしょ？僕と瑠衣の子供だよ？でも、瑠衣は僕だけのもの！」

今回のママからの‘ほっぺにチュウ’は衝撃だつたらしい。

いい気味だつと、思っちゃうのは普段のパパの行いの所為だよね？
パパはママ限定で心が狭い。

子供の僕に嫉妬。

大人気ないよね!!!

だから僕は早く大人になつてママをパパから守るんだ!!
でもね……………

「……………そろそろ僕を挟んで‘パパの主張宣言’するの止めてくれない？」

「っつ!!」

やつぱり忘れてたんだ!!!

「ふふふふふ……………」

「？」

いきなり笑い出すパパ。

何かを思いついたらしい。

「そうだね♪鉄を挟んでやることじゃないよね♪」
「パパ？」

「鉄、今から瑠衣と二人つきりで話し合ってくるね♪」

鼻歌交じりで鉄が言ったんだし〜と歌う。

つて、ママを拉致していちゃつくだけでしょ?!

そんな事させるか!!!

「このエロジジー」

「うるさいよ」

「凶星かつ!!」

「しばらく鉄は遊んでて♪」

とりやつと、パパは声を上げて僕を部屋の中央の方に滑らせた。

すると、僕の身体は……

「え?ぎゃあああああ!!!!!!」

回った。

僕が着ている着ぐるみの形は卵。

非常に回りやすい形で、重心は、僕が寝やすいように……と、一応考えて作られている所為か背中辺り。揺り籠を意識したんだと思う。その所為で……

回転!!!!

亀がひっくり返った感じで独楽こまの様にくるくる回る。

「パパのアホー!!!!!!」

「ふふふ!着ぐるみ卵回転機能付!流石は僕♪」

着ぐるみにそんな機能つけるな!!!!!!

「鉄?!パパ何してんの!!!!」

「遊んでるの♪楽しそうでしょ?さ、行きましようね♪僕のお姫様?」

パパはママをお姫様抱っこして、僕達が寝るときに利用した部屋に戻る。

嬉しそうに。

「っ!!!!!!」

その時のママの顔は……僕は知らない。

反省（後書き）

車の運転中考えたネタ。

着ぐるみが卵型なら回したくなっただのですよ！！！！

回る

まわるうゝまゝわるうゝよ僕うゝはゝまわるうゝゝ（回る・回るよ・僕は回る）

とめゝかたを知らないゝからああゝ（止め方を知らないから）
僕ゝはあゝまわるよううゝゝ（僕は回るよ）

誰かゝ止めてゝくれにいかあゝぎりいいゝ（誰か止めてくれない限り）

*とある替え歌です。

脳内に歌が流れるほど僕は回っている。

僕は現在も回転中。

パパがつけた機能の所為で。

ぐるぐるぐるぐる回る。

・・・気持ち悪いゝ。

回転が高速じゃないのがせめてもの救いかもしれない。

最近読んだ本に「人の体内には平行バランスをとるためのものが存在しており、それらが狂うと吐き気などを起こすことがある。」とか書かれている本を読んだ。読んだ時は何それ？って、思ってたけど・・・今、体験して良く分かった。

頭がぐらぐらする。

口から何か出そう。

「ママゝ！！パパでもいいから誰か止めてゝ！！！！助けてゝ！！！！」
きーもーちーわーるーいーいーいー

止まってええええええ！！！！

「・・・何かしらこれ？」

僕を発見した人登場！

僕のSOSを聞いた人が現れた!!!

神は僕を見捨てなかった!!!

「止めてください!!!」

僕は必死!

声からして知らない人。

僕自身回転してるのでよく分からないけど、赤いものが見える。

多分、女性・・・?

そんな事どうでもいい!

兎に角助けてください!!!

「・・・楽しそうよ?」

「楽しくないです!!!」

何言ってるの?!!

「そうかしら?・・・まあいいわ」

どかんつ!!!

突然の衝撃。

その衝撃を受けて止まった。

勿論、痛いと感じたところはない。

「・・・」

どうやって止めたかは分からないけど・・・助かった!

止まった・・・止まったよ!!!

あのまま回ってたら頭が可笑しくなるところだった!!

あゝ気持ち悪い・・・。

「・・・面白いわね・・・解剖しましょ?」

「え?」

止めてくれた人は僕を覗き込んでそう言った。

真っ黒で腰まである長い髪。赤いスーツ姿の女性。きりつとした目。

赤い唇。綺麗に整えられた眉毛。

仕事が出来て、カッコイイと呼ばれる女性のお手本の姿がそこにあ

った。

しかし、見たことも無い人である。

誰？

「????」

その女性は嬉しそうに笑うと懷から銀色に光るものを取り出した。先は薄くとがっていて、バターナイフのような形。

何あれ？

「ふふふふ。不思議そうな顔をしているのね？教えて差し上げますわ」

そう言つて女性はためらいもなく僕に振り下ろした。

「解剖する時に使う道具で‘メス’と言うのよ。使い方は・・・」

僕の着ていた着ぐるみが裂けた。

「!!!」

「お分かりになったかしら？因みに、解剖とは生物の体を切り開いて、形態・構造・死因などを調べる事をいうのよ？」

怖い!!!

僕、解剖されるの?!!!

回る（後書き）

一難さつて又一難。
受難が続きます。

赤いスーツ姿（前書き）

鉄君の運命は???

赤いスーツ姿

何故こんな事になったんだろう？

突然現れて女性によって刻まれた。

原型が分からなくなった着ぐるみが床に散らばり、綿や布が無残である。

「ふふふふふ．．．綺麗な色だわ？」

つうと、むき出しになった僕の胸を赤い爪がなぞる。

酔いも一気にさめる恐怖。

身体は金縛りにあつたかのように動かない。

そんな僕を彼女は嬉しそうに笑う。

「ふふふふふ．．．どんな仕組みになってるのかしら？わくわくするわあ？」

わくわくしないで！

助けて．．．

その時ママの顔が目には浮かぶ。

——ダメだ！！

僕は気付いた。こんな人をママに会わせちゃダメだと言う事に。

この場にママが現れたらママが怪我するかもしれない。

現にこの目の前に居る女性はメスと言う凶器を持っている。

危険！

ダメダメダメ．．．．．。

僕の所為で、ママに危険が及ぶのは絶対にダメだ！

どうしよう。

真っ白になっていた頭の中が一生懸命動き出す。

考えなくちゃ。

どうすれば良い？

どうしたら助けを呼ぶことなく僕は助かる？

考えろっつ！！！

「・・・あら？良い顔つきになってきたわね？何かあったのかしら？」

頑張れ・・・頑張れ僕。

顔を上げて！女性を見るんだ！

「・・・お姉さん、僕お礼言ってなかったよね？」

良かった。声が震えずに出た。噛みそうになったけど。

先程まで顔を真っ青にしていた僕が真っ直ぐに女性を見つめる。

「お礼？」

「うん！ぐるぐる回っていたのを止めてくれたでしょ？」

震えるな体！怯えるな僕の心！

「有難うございました」

頭を下げる僕。震えそうになる手をぐつと握る。

少しでも、解剖する気を無くす為に僕が選んだ事。

それは、目の前の女性と会話をする。

人を呼ぶための大声は出来ない。ママに被害がおよぶ可能性があるから。

暴れて抵抗する事は出来ない。子供が暴れても相手は大人。無意味だ。下手をすれば更に危険になる。

なら、今の自分が出る事。

相手の気を逸らすなり、隙を作るしかない。そうすれば、チャンスがあるはずだ！

「ふふふ・・・どういたしまして？」

「どうやって止めたの？」

無邪気に、子供らしく、人懐っこく。

引きつりそうになる頬。

笑うんだ僕！

目の前に居る人は僕の大好きな人。

そう思っ

「回転してるものは中心が狂えば止まるのよ?」

「?」

「そうね・・・例えばこの棒の下に人差し指を置くと・・・」

「凄い!」

女性は懐からボールペンを取り出すとその下に指を置いてバランスをとる。すると、やじろべえの様になる。

「回転してる時はこの状態なのよ。この棒を落とす時はどうすればいいかわかるかしら?——それが答えよ。お分かりになって?」

「うん!じゃあ・・・」

この女性は思ったとおり、質問などにはきちんと答えるタイプのようだ。

「・・・」

女性は何を思ったか、僕の前をぐいつと掴んで上げる。

「ふふふふ。時間稼ぎ?気を逸らす?それとも私の隙を作るかしら?・・・気は済んだかしら?」

「!」

僕の考えはお見通しだったようだ。

「ふふふふ。30点と言ったところね。人は突然、雰囲気や表情を変えると驚いたり警戒したりするものよ?まあ・・・泣き叫んだり暴れたりするようなら痛い目にあつてたわね。それを選ばなかった事は褒めてあげるわ」

僕の顎から手を離すとスーツの胸ポケットから黒いメスを取り出した。

「これは表面にダイヤモンド加工がされていて、切れあじ抜群なのよ?」

「っ!」

黒々とした細くて薄いメス。

「このメスが2番目のお気に入りなの。頑張ったご褒美としてこれで解剖してあげるわ?」

いやあああああああああああああ!!!!!!

そんなご褒美いらないからああああああ！！！！

ガラッ

「鉄く？」

僕の絶体絶命のピンチに間抜けな声が聞こえた。

それはパパの声。

ママとのイチャイチャでご機嫌なパパの声。

ドアを開けたパパは僕を見た。

着ぐるみを刻み、子供のむき出しになった胸にメスを向ける女。

恐怖に震える僕の姿。

「っ！」

パパの顔が真っ青になる。

「ふふふふふ？」

タイミングよく出てきたパパ。

女性はそれに怒る事もなくとても嬉しそうに、にたあく、と、笑った。

僕を解剖しようとしていた女性は僕に興味をなくしたらしい。

その証拠に、パパが現れてから僕を一度も見ない。

「は・る・とおく？」

女性はパパの名を呼ぶ。

嬉しそうに。

知り合いかな？

「どどどどど……どうしてココに???」

慌てるパパの声。

「ふふふふふふ？」

女のターゲットは僕からパパに。

……助かったのかな？

女は黒いメスを仕舞うと、スキップをしながらパパの方に向かった。カツツカツツと、ヒールの音が響く。

「絹恵さんから連絡を頂いたの？」

ハッとしたパパが慌てて逃げようとする。

それに気付いた女が濁声を出した。

とても低い声だ。

「逃げんなよ糞ボーズが」

怖っ！！

「！」

そして、懷からメスを取り出すとパパに向けて放った。

カツカツカツ！！

投げられたメスをパパはよける。

凄い！何気にパパ運動神経良かったんだね。

「ふふふふふ？」

が、避けた先に女が待ち構えていてパパは捕まった。

パパが避ける方向を計算して投げたみたい。

「どうして連絡をくれなかったのかしら？」

「・・・」

会いたくなかったからだと思う。

初対面で解剖しようとする女性。勿論、初対面じゃなくてももしちゃいけないけど。そんな知人には二度と会いたくないって、僕なら思う。

しかも、何本持つてるか不思議に思うほどメスを持ち歩いてる上、室内をヒールを履いたまま動き回ってる。不気味だ。

パパじゃなくても関わりたくないって思うよ？

「は・る・と？」

女はパパの顎を掴むとキスをしようとして、パパの手に遮られた。

「何で貴方は直ぐそれ^{キス}をしようとするんです？」

「愛してるからよ？」

「うぎゃあああゝ」

女はパパにキスの嵐を送った。

パパの抵抗は抵抗にすらなっていないみたい。

・・・凄い。

女性は簡単にパパの腕をひねってる。

体格から言ったらパパの方が力がありそうなのに。

この女性何気に最強だよ！

「・・・」

今のうち・・・だね？

僕はその隙に隣の部屋に避難したのは言うまでもない。

パパを生贄に捧げたとも言つかも？

赤いスーツ姿（後書き）

・・・危ない人ですね・・・。

良い子でもそうじゃなくても女性のマネはしないで下さい！危ないですから！！！（笑）

推理中

格好が酷かったので着替えた。

あの格好をママに見られたら心配させちゃうしね！

お泊りの時は必ず寝る場所と、荷物置き場が決まっていて、荷物置き場を見てみた。

パパがいるなら荷物があるはずと思って……。

……あつた。

パパは昨日の夜、（曾ばあちゃんに追い出された後）僕達のお泊りの荷物を持って来た。

その証拠に僕用の青い鞆とパパとママの荷物が置いてある。

その内の僕の鞆を開けた。青い鞆の中に下着と洋服が入っていた。この洋服は見た事がない。

広げてみると緑のチェック柄のフード付の上着に‘Magane’
と、僕の名前が刺繍してある。

パパのお手製だ。

パパは手先が器用で、時々こうやって洋服を作ることがある。

因みに回転する着ぐるみもお手製。……いらなかったけど。普通にパジャマで良いよ。

「……あれ？」

何かが引つ掛かった。

準備が良過ぎると言うか……タイミングよくお手製のものがそろつてあるものなの？

隣にあったママの鞆を開けて見ると入っていた。赤いチェック柄のボレロ。勿論ママのネーム入り。

もしかして、初めからお泊りの準備してた？

それを考えるとワザと曾ばあちゃんを怒らせて出て行ったのかもしれない。

不自然に見えないように。

「……もしかして理由があった？」

「……まさか？」

でも、そう考えると僕が直ぐに寝た理由も納得する。寝つきの良い僕だっけ着替えさせられたら流石に起きる。翌日の朝になるまで気が付かないってありえない。

「盛られた？」

何時の間に???……もしかして玄関先でパパが僕を抱きとめた形で口を塞いだ時？

「……」

曾ばあちゃんも……？

……曾ばあちゃんはパパの考えてる事に気が付いて協力したのかもしれない。

だから直ぐに追い出した。

直ぐに????

何で直ぐに？

あれ？

「……ああー!!!もう、分かんないよ!!!」

頭がごちゃごちゃする。

「……」

何かすつごく落ち込んできた。

回転する着ぐるみを止められなかった僕。

その所為でママをパパに奪われ、変な女性が出てくる。

その女性から僕を救ったのは、結果的にはパパだ。

ダメな僕。

強くなりたい。

強くなりたい!!

「はあ……」

僕は深々と溜息をついた。

何で僕の手はこんなにも小さいんだろう？

何で僕の身体はこんなにも小さいんだろう？
何で僕の身体は体力・腕力がないんだろう？
何で僕は・・・子供なんだろう。

・・・数えたら限が無い。

「何をしているんだ？」

僕の背後から曾ばあちゃんの声。

もう、そんな時間？

曾ばあちゃんは最低でも13時間は寝る。

時計を見ると10時。

「お着替えしてた・・・」

「そうか？・・・何、暗い顔をしているんだ？」

「・・・反省してた」

「失敗でもしたか？」

そう言つて曾ばあちゃんは優しく僕の頭を撫ぜる。

「・・・大きくなる為にはどうしたら良いのかな？」

そう言つた瞬間、曾ばあちゃんにデコピンをくらつた。

いたっ！

「成長が止まつて80年以上経過してるワシに言つか？」

ぎゃっ！

逆鱗に触れた???

「・・・いいか鉄。雨中の家系は‘成長したい’と望むだけ虚しくなるぞ？・・・だが、コツはある」

そう言つてにやりと笑う。

「っ！！」

コツ?!!

「雨中家の血を引く者は老いる事が難しい。ワシを見れば一目瞭然じゃ。しかもいつ成長が止まるか分からない・・・」

3歳児の身長で成長が止まる可能性がある。

それは嫌だ。

何がコツなの?!!!

「・・・」

「何事も楽しむ事じゃ
楽しむ？」

「すると、不思議と大きくなるんじゃ」

曾ばあちゃんはニツコリと笑った。

「・・・楽しむ・・・？」

推理中（後書き）

・・・こう見ると雨中家はマイペースな一族ですね・・・。

正体

その後、僕と曾ばあちゃんはパパ達の居るお部屋に行った。

僕が‘お客さん’が訪れている事を話すと「ああ・・・ビックリしただろ？」との事。

ビックリで済ませるんだ・・・。

「悪いがドアを開けてもらっても良いか？」

「うん！」

曾ばあちゃんは手に荷物を抱えてるから、僕がドアを開ける。
がちやつ

「・・・」

うわ・・・

変な光景が目に入った。

女性に抱きしめられてるパパの図。

嬉しそうな女性に対してパパはすごい不機嫌顔。

その不機嫌顔には口紅による赤いキスマークがたっぷり！！
気持ち悪い

「パパ、ウワキ？サイテーダヨ」

パパの不機嫌そうな顔からして拘束されて抜け出せないんだろうね。

パパはママを溺愛しているから浮気は無いって分かってる。

ふふふふ。

嫌がらせです。

その証拠に棒読みの片言で話す僕。

「・・・思ってもない事口にする？」

「エーオモッテルヨ・・・その姿、ママが見たら泣くよね？」

「・・・」

あれ？何かパパが嫌な事思い出したって言う顔してる。

もうやった後なの？

ママを泣かせるなんて酷い！！

「それは無いな。一年ほど前、この姿を見た瑠衣ちゃんは爆笑してたぞ?」

曾ばあちゃんが否定をした。

「そうなんだ・・・」

既に見せたことあるんだ・・・。

「・・・そろそろ放してやったらどうだ?」

と曾ばあちゃんが言う。

「ふふふふ・・・。久しぶりなのよ? 嫌よ」

「嫌われても良いならそうしとけ」

曾ばあちゃんがそういった瞬間、慌ててパパを解放する。

「・・・」

何かどこかで見たよ? この光景・・・。

女性のやっっていることをパパに置き換えると・・・日常で起こってるよね?

あれ?

「身内?」

「何だ、知らなかったのか?」

自己紹介する前にあんな事になったんだよ?

強烈なインパクトで忘れられなくなっただけ。

「鉄、これはワシの・・・息子だ」

「えええ?!」

息子?

娘でもなく

息子!!!!

曾ばあちゃんは女性を指差して言っている。

「・・・えーと・・・お祖父ちゃんって事お?」

「ふふふふ・・・初めまして? 春斗のお父さんですの。よろしくね」

そう言つて女・・・じゃない、お祖父ちゃんは僕に近づくと、胸元からメロンパン2個を取り出した。

「!?!」

これが胸の膨らみの元？！

何でメロンパンなの？

「暖かいわよ？」

そう言っつて僕の掌に乗せた。

僕の掌にメロンパン・・・。

「えーと・・・鉄です。」

頭が真っ白になった僕はとりあえず・・・名前をなのつた。

正体（後書き）

やっと雨中家全員そろった！。
やった！。

お祖父ちゃん

今まで出会った人で一番インパクトのある人物。
それは・・・僕のお祖父ちゃん。

「お祖父ちゃん、じゃなくて、夏美なつみと呼んでね？」

「夏雄なつおのくせに」

ぼそつと曾ばあちゃんが言う。

「この格好で、夏雄」は止めて！」

そう言えば・・・何で女装してるの？

「夏美さんは何で女装してるの？」

「ふふふふ。似合うからよ？この細い筋肉質じゃない身体は女装にはうってつけなのよ？」

・・・趣味？

「ふふふふ。美しさって素晴らしいわね」

「・・・」

女装でナルシスト？

日頃からメスを持ち歩く危険人物。

「私の愛しの愛しの可愛い可愛い春斗！お父さんの胸にお・い・で？」

「嫌です！」

しかもパパを溺愛。

「・・・もしかしてあの時試したの？」

パパの子供にふさわしいかどうか。

解剖をわざわざ説明して恐怖を煽った上で僕がどう反応するか。

「ふふふふふ。正解よ」

何か。

とてつもなく嫌になる今日この頃です。

お祖父ちゃん（後書き）

今回は主人公……。疲れてます。
成長のための愛です。愛。

次回の話は少し時間が飛んでいます。

初体験（前書き）

時間が経ってます。

小説の雰囲気も変えてみました。

初体験

カーテン開けたら太陽とは違う光が見えた。目に刺さる、鋭い光。何だろう？

僕は気になったので外に出た。

道の端に立って辺りを見渡す。特に上の方を見ていたら通りかかった車のドアが突然開いてそのまま拉致。

びっくり！

誘拐ってこんなに簡単に出来るものなんだね。初めて知ったよ！

車は僕が乗った事ある車よりとっても広い。そして、落ち着いたこげ茶色のソファアがとても軟らかい。そのソファアに抱きついて、頬で感触を味わっていると、頭上に光るものを発見した。

……ミラーボール？

テレビでしか見た事が無いけど……カラオケとかスナックとか夜の街に存在するよね？

ミラーボールって車の中にあるものなんだね！

そんな事を考えていると、僕を引き込んだ犯人さんと目が合った。均等についた筋肉。整った顔立ちで、男らしい男っていう感じ。白髪が混ざっていない真っ黒の髪から30代だと思う。着ている物は灰色のダブルスーツ。休日にスーツ姿で誘拐って変だと思うのは僕だけ？

とりあえず、僕の知らない人。顔を一切隠してないのは何だろうか？

「……可愛いな」

そう言っただけ犯人さんは無表情で僕の頭を触れた。

……普通の子供ならココで大泣きしてると思う。大人の男の人が、微笑む事無く手を伸ばす行為は叩かれるって思う。しかもこの犯人さん、スーツを着ていても良く見かけるサラリーマンには見えない。「……ふふふ」

頭を触れられている行為を撫でられると解釈した。因みに僕は好き。

なので泣く事も怯える事もせず、微笑んだ。すると犯人さんの手は一度固まり、今度は両手で髪が乱れるくらい撫でられた。力強い所為で目が回る。笑わなければ良かったって後悔……。

「ぼっちゃま。程々になさった方が……」

「ああ……」

運転手さんの一言で犯人さんの手が止まる。僕からは運転手さんの顔が見えない。声からにして20代かな。

僕が子供だからか、特に目隠しや縛られる事無く目的地と思う場所に到着した。

僕が暴れなかったからって言うのもあるかも？

車に乗せられた時点で大人しくソファに座り、泣く事も暴れる事もしなかった。

何でって？

楽しそうだから！

武器も持っていない子供が大人に勝てるはずが無い。日頃からパパの所為で分かってる。無駄な抵抗は怪我をするだけ！

それに目隠しをされなかったから大丈夫！道順を覚えたので帰ろうと思えば帰れる。近くには交番も会ったし。

曾ばあちゃんも「何事も楽しむ」って言ってたしね！

田嶋と書かれた表札の横にある黒い重そうな鉄格子の門。それが左右に自動に開く。その門を車がくぐると着いた先はレンガで出来た壁が印象的な大きな家。赤いバラが家の両側に咲き誇る。綺麗に整えられた広い庭。豪邸って言うんだろうね！

本とかテレビとかで知ってるけど実物を見たのは初めて。

幾度の初めての経験に胸が躍る。

「ココで遊んでてな？」

そう言つて僕は部屋に入れられた。広い部屋の中には僕が埋もれてしまいそうになる量の玩具と縫いぐるみがあった。

……小さなお子様がいる家なのかな？

「うわぁーすごおい！」

はしゃいだ振りして小走りで玩具の所に向かう。その様子を見た犯人さんは安心したのか、ドアを閉めた。

沢山ある玩具はどれも新品のように傷一つ無い。変形合体が売りのロボットや色々の形が魅力のブロック、英語も学べる玩具。……どれも見覚えがある。

何でって？

パパが家に持つて帰つてきた試作品と同じものだから。

パパとママは玩具会社に勤めていて、パパは良く家に持ち帰る。子供の力で組み立てが可能とか、危険性が無いか確かめさせる。身体は3歳児で、遠慮なく発言するからだろうね……。楽しいからいいけど。

因みにブロックは市場に出回っていない。

「パパの所為で巻き込まれたのかな？」

生まれてから3ヵ月しか経っていない僕は交友関係がとても狭い。どう考えても犯人さんは会社の関係者。しかも表札が田嶋。パパ達の勤めている会社が「玩具会社田嶋堂」って言うから間違いない。

「……何やったんだろう？」

きつとパパが恨まれるような事をしたんだらうね！

そう思っているとドアが開き一人の男性が入ってきた。犯人さんがよこしたのかな？

「お兄さんの名前は太郎だよ。よろしくね」

僕の目の高さにあわせて膝を曲げた太郎兄さん。革の財布の様なこ

げ茶色の髪と目に入りそうな長めの髪は今時の若者風。たぶん20代くらい。

…… 何処かで聞いた覚えのある声なんだよね…… 何処だろう？

そう思いつつも、元氣良く子供らしく挨拶！目を水晶の様に輝かせて大きく口を開く。

「まがねです！たろうにーたんよろしく！」

3歳児の言葉遣いってこんな感じかな？身の安全のためにも一般的な子供のふりをしなくちゃね！警戒されるとやりにくいしね。

…… パパの所為で苦労するよ……。

「すごいね。鉄くんはお名前が言えるんだね」

「えらい？」

「うん。えらいよ！」

両手を天井の方に挙げて喜ぶふりをする僕。

…… うん。難しい。

この兄さんベビーシッターの人かな？子供相手が慣れてるね。ぼろが出そうだよ！

早くもピンチ？

…… パパなら「誘拐された地点で初めからピンチでしょ？」って鼻で笑いながら言うんだろっね！想像しただけでイライラする！

用意された玩具のある部屋。

子供用のベッドにクローゼット。

子供の相手をするお兄さん。

計画的な犯行の上、長期にわたって僕をココで監禁する予定？

…… 情報が足りないね。

そうだ！！

「たろうにーたん、かくれんぼ、ちよう！」

「かくれんぼ？」

「うん！はじめはぼくがおにね！」

大声で数字を言った後、探すふりをする僕。

太郎兄さんの居るベッド付近は一番最後になるように部屋の中を移動。

「どこかなあ？」

とか言いつつクローゼットの中を開けて中身を確認。

青い服にリボンのついた白い服。

小さな帽子に箱に入った靴。

色々あるね……。

男の子用の服以外にも女の子用もある。

って事は僕の為だけに用意されたわけじゃないんだ……。

「うーんこっち？」

試しに僕たちが入ったドアを開けようとするが案の定鍵がかかっている。

他のドアも試してみる。

探検♪

初体験（後書き）

誘拐ですね！

一度書いたものを何度も直した所為で投稿に時間がかかってしまいました！

……すみません。

今回は家の外に出るので未知の世界です（笑）

探検

結果。

……変なものを見つけたよ。

それは大量の写真。

クローゼットの近くにあった引き出しのついた棚。その棚の引き出しだけ鍵がかかっていたので気になった僕は開けてみた。そしたら、写真が入ってた。

どうやって開けたかって？ 金庫じゃないもん結構簡単だよ！

「……」

さて、どうしよう？

10冊以上ある黒いプラスチックのファイル。一つ一つ丁寧にファイルに収められた写真に写っているのは全て僕だった。

びっくりだよ！

撮られた記憶が無いし、写真に写っている僕の視線が合っていない事からこの写真は全て隠し撮り。

「……」

しかもこの写真に写っている僕は今の僕。つまり3歳児くらいの成長をした僕。

僕が生まれてから3ヶ月と2週間。3歳児くらいに成長したのが3ヶ月の時。…2週間で10冊以上の隠し撮りをしたことは冗談抜きで退く。

…何で気が付かなかったんだろう。

そして、僕は思い出した。今日カーテンを開けた時に気になった光。もしかしたらカメラのレンズが太陽の光に反射したものじゃないかと。

……パパの所為で誘拐されたと思ってたけど……もしかして僕が目的？

「……」

予定変更。

長居はするものじゃないよね。

「たろうにいたん！ み、つ、け、た！」

とつくの昔に見つけていた太郎兄さんの方に小走りに近づく。いかにも‘今、見つけたの！ 嬉しい！’って言う満面の笑みを忘れない。

そしていきいよく、ベッドの横に隠れる様にしてしゃがみこんでいた太郎兄さんの胸に抱きついた。

「あはは。見つかったった」

嬉しそうに笑う太郎兄さん。

嬉しそうな顔してるとこ悪いけど僕は帰る。太郎兄さんと遊んでいる場合じゃないもん。

「……ねえねえ。僕かえるね」

犯人さんが戻ってくる前に、さっさと帰らないと！

「……え？」

僕の発言に頭が真っ白になったみたい。

そうだろうね。誘拐された子供が‘帰る’って発言してるんだもん。

帰る発言をしている子供に対してとる方法は2パターンある。

1つ目は誤魔化す。丸め込むとも言つ。

2つ目は誘拐だと理解させる。その場合、今の僕の待遇が変わる誘拐された時から僕は‘誘拐されてる事を理解してない子供’って感じに振舞ってる。

現にそれを犯人さんは理解して、僕を縛ったりせずに玩具などある

部屋で遊ばせてる。もちろん何かあると不味いから、子守役兼、見張り役の太郎兄さんが居る。

太郎兄さんはどれを選ぶのかな？

太郎兄さんは1つ目を選択。良かった。

どこかのアホだと2つ目を選択の上、縛ったりするらしい。3歳児と思われる子供だよ？ 何が出来ると言うの？

暴れるか大泣きするぐらいしか出来ないのに。

まあ……一般的な子供だったただけ。

「……ぼっちゃまが戻ってくるまで一緒に待とうね」

太郎兄さんは困ったなっていう苦笑いをしながら僕の頭を撫でる。

……「ぼっちゃま」？ 最近聴いた覚えのあるフレーズ。

どこだっけ？

ぼっちゃまって犯人さんの事を言ってるんだよね？

「！」

思い出した！！ 僕を誘拐した時の車の運転手さん！

暴走した犯人さんを止める時に「ぼっちゃま」って言ったんだ！

うん。どうりで聞き覚えのある声。

「鉄くんは良い子だもんね。出来るよね？」

その言葉に僕は大きく首を左右に振って太郎兄さんから離れた。

「おせわになりました！」

「え……」

今までの僕の行動なら「うん！」と大きな返事するんだろう。

犯人さんが戻ってきたらアウトだからいいお返事はしないよ。

僕は入り口の方へ向かう。

「まっ……うわっ！！」

立ち上がるうとした太郎兄さんは僕が仕掛けた罠にひかかった。

抱きついた時に足元に縄跳びを転がしたんだ。勿論、両足が絡まるようにね！

他にも色々仕掛けたから楽しんでね太郎兄さん♪

「ふふふふ」

この部屋にはおもちゃと言う名の道具があるから仕掛けやすい。太郎兄さんを探すふりをしながら情報収集と罠を沢山仕掛けた。大丈夫、命の危険は無いよ。

「えーと…コレがいいかな？」

玩具が入っていた少し大きめでプラスチックで出来た箱を僕は入り口に持っていく。そして箱をひっくり返すと、僕はその上に乗った。

うん、丁度いい高さ。

僕は微笑む。丁度目の位置になった鍵穴を覗き込み、ドアノブを握って弄る。

「ぎゃあ〜」

その間、太郎兄さんの悲鳴は続いた。

ブロックで作った3番目の罠にひっかかったみたい。

僕は太郎兄さんの悲鳴を聞きつつ、ドアの鍵を開けた。
何か楽しくなってきた！

「ばいばい」

僕は笑顔で太郎兄さんに手を振ると部屋から出た。

探検（後書き）

遅くなりました。久しぶりのアップです。
遅くてすみません。

脱走中

各部屋のドアの横に植木鉢が置いてあり廊下を華やかに彩る。突き当たりの窓は大きく真つ青な空が覗く。茶色の花柄の模様した絨毯が廊下の端から端までに敷いてある。中央にある階段の手すりは木で出来ていてその廊下の雰囲気壊す事無く見事に調和されている。

……それにしても見事に誰も居ない広い廊下。

僕は部屋を出て静かにドアを閉めると辺りを見渡した。

犯人さんの事だから人払いしてるんだろうなあと思っただけど当たったみたい。ドアの近くに見張りを立てていたら、太郎兄さんの悲鳴や物音で顔を覗かせたはずだしね。

とりあえず、部屋脱出成功！

ココからは階段を下りて外に出るんだけど……どうしよう？

そこまで運動した事無いから体力が持つかどうか心配。

ココは一番奥の突き当たりの部屋。

「……」

そうだ！ 先にやらなくちゃいけない事やろうかな」

僕はポケットから携帯電話を取り出した。シルバー色で‘T・H’とイニシャルの入った木で出来たストラップ付き。勿論コレは太郎兄さんのもの。抱きついた時にポケットから拝借した。

男性って財布とか携帯をズボンのポケットに入れとくから取りやすいよね。

「えーと……」

僕は携帯電話にママの携帯電話のナンバーを入力すると耳に当てた。

TRUUUU……

がちゃっ

『はい?...ちよっ』

直ぐにママが出たあとパパの声がした。

『その番号、僕知らないんだけど...誰？ 瑠衣？』

て.....

小声だけどバツチリ聞こえた。そしたらママの声が変わった。

『パッ...あやっダメッ......んうつ...』

その声は甘く色っぽい...と呼ばれるもの。

そしてピチャピチャと聞こえる水のような音。

「.....」

何が楽しくて息子がママのその声を受話器越しで聞かなくちゃいけないわけ？

なんかの罰？！

ココで僕の声なんか出したらママが傷つくから、無言で通話を切った。

あの変態め。知らない番号だからってくだらないヤキモチでママに悪戯するなんて！

非常に迷惑。果てしなく災厄。

掛けなおしても無意味な事は分かってる。

「はあ...」

僕は深々と溜息をつく、携帯電話にメッセージを入力した。

TO> パパ

題名> 鉄です

今、田嶋くんのお家で遊んでるの。

連絡遅くなつてごめんね！

今から帰るね。

——って、ママに伝えといて。

PS・電話の相手が変態さんだったらどうするの？

よし、これでいいかな。

本当はママに送信したい。でも、先程の電話が僕だと分かるのは危険。

ママが気まずい思いをするのは避けないとね！

僕は確認した後、パパ宛にメールを送信した。

そして僕は階段の方に向かった。

因みに僕は隠れる気は無いから普通に歩く。鼻歌も歌っちゃう♪

階段付近に到着した頃、手に持っていた携帯が鳴った。

「？」

だれだろう？

待ち受けを見ると見覚えのある番号が表示されていた。

あ…パパだ。

僕はボタンを押して出た。

「はい？」

『ふふふ…鉄？』

「何？」

何で笑ってるんだろう？ 不気味なんだけど…。

『初めての誘拐は楽しんでる？』

「ん…そこそこ？」

僕はメールで誘拐されたとは書いてない。でもパパは、＜田嶋＞だけで全て理解したみたい。最近、曾祖母ちゃん家にお世話になっているのもパパとママが家に居なかったのもそれが原因だから直ぐに分かったんだろうね。

『ふふふ…。それにしても相変わらず詰めが甘いね』

「…詰めが甘い…？」

しかも相変わらずって…！！

『迎えに行くまでそこで遊んで！ あっ！ そうそうその服のポケット色々入ってるから』

「え？」

そう言っていると切れた。

えーっ！！！！

今すぐ帰りたいのに！！！！

むくれつつ、洋服のポケットに手を入れる。

出てきたのはイヤホンとフック付きのシルバー色のクロスの形をした飾りと黒くて丸い玉。

…何か準備良過ぎるよね？

今着ている洋服はパパお手製。しかもポケットには道具が入っているというオマケ付き。

「…」

あの変態親父！！！！

怒り爆発。

まるで誘拐されることを見越してたかのようにアイテムがポケットに入ってた。

しかも使い方は以前聞いたもの。つまり、パパは計画的に僕を誘拐させるように仕向けた可能性が非常に高い。

「ふふふふふふ…」

腹が立つ。

僕は口元に笑みを浮かべるとパパの計画を潰す事に決めた！

僕は携帯のストラップにクロスの飾りを付けると人目につきそうな所に放置した。そして、自分の耳に片方だけイヤホンを付けた。

階段を降りて下のほうにでも行こうかな。そう思って階段をくだる

と女性に出会った。

「！」

女性は僕を見て驚いた顔をした。

ココは先手必勝！

「おねえちゃん！」

僕はニコニコと微笑んで女性の所に行く。

「…子供？」

小さい声だけど女性が呟いた言葉が僕の耳に届く。その言葉に確信する。

この誘拐は計画性が無いうえ、‘誘拐’と言う事を知っている人が少ない事に。

この屋敷に住んでいる人が全員知ってるなら僕を見て不思議に思うはずが無い。

…つれて来られた時点で思ってたんだけどね」

「あのね！いま、ぼっちゃんまおにーちゃんとかくれんぼしてるの」

「ぼっちゃんまお、かくれんぼ？」

「そう！だからね」

僕は口元に人差し指を立て喋っちゃんダメのポーズをする。

「しいーだよ？」

初めて自分が幼い事に感謝した。大人だったら見つかったとたんに侵入者扱いされてる。子供だから女性は不思議に思いつつも警戒心が無い。しかも子供の突拍子もない発言に疑問を持つ事無く頷く。

どんな発言しても許されるって楽だね」

とりあえずコレで僕が脱走した事が犯人さん伝わる事がない。上手くいけば女性の口から同じ仕事仲間に情報が回り、かくれんぼに協力してもらえる可能性が増えた。

「ええ、良いわよ」

「ありがちよう！」

その場でぴょんぴょんとウサギのように跳ねて僕はその場を後にした。

脱走中（後書き）

誘拐事件なのに…誘拐っぽくないのは、ほのぼの、としているから
なんでしょう？

出会い

何をしよう？

計画無しの行き当たりばったりは仕方が無いよね。情報が少ないんだもん。

どうしようかなあ〜♪

「っっ！」「」

僕はてくてくと歩くと角を曲がった所で人とぶつかった。

考え事しながら歩くのは危ないね。

大人の人とぶつかったので、子供の僕は尻餅をついた。

僕とぶつかったのは濃い紺色のスーツ姿の真面目を絵に描いたような人。その人の手には似合わないピンク色のA4サイズの紙が入りそうな封筒を手にとっていた。

うん、僕の知らない人。

「大丈夫…ぶぶぶっ！！！」

真面目そうな人は僕の事を見ると顔色が変わった。真っ青と言う色に。

あれ？ 関係者？

この反応するって事は僕の事を知ってるって事だよね？

真面目そうな人は手に持っていた封筒をその動揺の所為か足元に落とした。

うーん気になるなあ。なんかね、家で見た覚えがあるんだよね…あの封筒。

「おとちたよ！」

僕は立ち上がると同時に封筒を拾った。

「ああっああ…有難うございます…」

わざと口の方を下にして、真面目な人が掴みそうな手前で僕は封筒から手を離れた。

「っ！」

真面目な人が慌てて封筒の端を掴むが、その所為で中身が落ちた。
勿論、わ・ざ・と！

出てきたのは数枚のプリントと犯人さんが写った写真。写真の背景は僕の家の前道路。しかもこの角度だと僕の家の中から撮ったことが分かる。

「ひろっひろわないでっ！！！」

真面目な人は大慌て。

「……」

封筒の中にこんなが入ってたんだ…。犯人さんって誘拐と盗撮以外に物あさりまでしてたんだ…。

封筒の中身って犯人さんの犯罪の証拠だよね？
もしかして…

「ぼくのパパからもらっちゃのお？」

「っ！！」

僕の一言に目を丸くする。

「ああ……なるほど」

思わず僕の声のトーンは低くなる。

あのクソ親父、色々準備してたみたいだね？

悪いけど、僕が利用させてもらう。

「……」

「僕の名前は雨中鉄。知ってるみたいだけど、雨中春斗の息子。宜しくね」

「……………田中です……………」

田中さんはぶるぶると震えながら声を出した。

「協力してね？」

「っ！」

勿論、否定権は無いからね！

協力者

「…協力ですか？」

「僕、がっしりとした体格の男性で、ぼっちゃま、と呼ばれている人に誘拐されたの」

笑顔で伝えた言葉に更に顔色を悪くする田中さん。その場に肩を落として膝を突く。両手で頭を抱えた。

「あああああ…」

うめく声。ぼそぼそと「間に合わなかった…」とか「会社が…会社が…潰れてしまう」とか呟いている。

…はじめて見たけどコレを絶望って言うのかな？

しばらくしてハツとした田中さんは僕の顔を見た。

「ももも…申し訳ありません！喜んで協力させていただきます

！…！」

いい返事♪

「ねーねー田中さん。僕のパパの事好き？」

僕の言葉に完全に固まった田中さん。

その顔には完全に「ありえない」と言う顔。

「だよね！」

「…それと協力とどう関係があるのですか？」

「えー？ 気持ちの問題だよ？ この誘拐だってパパが謀ったんだよ？ 僕をダシにして暴れまくるつもりみたい」

「っ！」

パパから証拠物を貰ってるって事は、それなりに信用しているか使えるかのどちらかでしょ？

そんな人がパパを崇拜^{すき}なら、うさ晴らしに嫌がらせした方がスッキリすると思うんだよね！

…けど、違っみたいだね。残念。

「…暴れまくるんですか…？」

「喜々として家に眠っていた、危険な玩具たち、を使うんじゃないかな？」

「…危険な玩具…？」

その問いに僕は曖昧な笑みを浮べた。

うん、詳しくは知らないほうが幸せだよ？

「…とりあえず、暴れる理由を奪おうと思っただけど…」

「脱走ですね…」

田中さんの言葉に僕は首を左右に振る。脱走なら僕だけの力でできる。

「違っよ。誘拐した事実は消えないから意味が無いよ。…それに、

パパは既にココに向かつてるんだよね」

パパの事だから誘拐シーンをビデオにでも撮ってるんじゃないかな？

「だから僕が先に**はんにんさん**にぼっちゃまにお仕置きしようと思っただ。再発防止の為に」

残念な事に、パパにつめが甘いつて言われて気が付いたんだよね。再発防止をしないと同じことの繰り返しだよー！。

家知ってるし、両親と同じ会社の人間だしね！

「お仕置きですか？」

「うん！」

田中さんの目が輝いた。

あれ？

P P P P P

突然の機械音。

田中さんは胸ポケットから携帯電話を取り出した。

「ハイ」

『遅いぞ田中！！！』

受話器から怒鳴り声が聞こえた。あまりの声に僕の耳にもはっきりと聞こえた。

…ぼっちゃまの声だ…。

遅いぞって事は会う予定だって事だよね？

僕を誘拐した後、太郎兄さんに預けて行ったのは田中さんと会う予定があつたからなんだね。

じゃなかったら僕と…。

うん、考えちゃダメ。

「……社長言いたい事はそれだけですか？」

田中さんの声は驚くほど低い声。

あれ、怒ってる？

「何て事をしでかしてくれるんですか！！！！」

誘拐は犯罪です

！！！！」

…あ。

田中さんそれ喋っちゃダメなのに…っ！

『誘拐？ 何でそんな事を言ってるんだ？』

「ココに社長の天使がいるんですけど？ 説明してくださいませんか？
よね？」

『何だと！！！！』

あーあ。

僕が脱走した事がバレちゃった。

僕は深い溜息をした。

「田中さん」

「？」

「おんぶ！」

『っ！……！』

僕はワザと電話の相手に聞こえるように大きい声で言った。

そして、田中さんの手から携帯電話を奪うと電源を切る。

田中さんは不思議な顔をしつつその場にしゃがみこんで背中を僕に向ける。

「頑張つてね？」

僕はそう言つて田中さんの背中に抱きついた。

「あの……？」

「僕ね、閉じ込められていた部屋から脱走してココにいるんだよ？」

「っ……！ ……申し訳ありません」

僕の言葉に田中さんの失態に気が付く。

責任持つて僕の足になつてね！

さあ、追いかけてこの始まりだね。

田中　ゝ悪夢ゝ（前書き）

登場人物の1人である田中さんサイドのお話です。

その方が誘拐の事情が分かるかと。

…鉄くん少しの情報で理解しちゃう子なのでこつ言つのも必要かな
つと…。

田中　く悪夢く

初めまして、私は田中と申します。

私の家は代々から田嶋家にお仕えていて祖父が執事のような事をやっています。田嶋家は田嶋堂と言う玩具会社を経営しております。

父は会長の秘書。私は社長の秘書をしております。

私の仕えています社長は社員にも人気のある方です。若くして所長を就任なさると色々と生じる問題も見事に解決されて、お仕えさせて頂く私としてもとても誇らしいお方です・・・が、少々問題な事があります。

「可愛いね……」

仕事中、パソコンを使っている社長が一言。

何を見ているのかと画面を覗いてみるとそこには……。

「天使のような愛らしさだ思わないか！！？」

画面いっぱいに広がる少年の写真の映像がありました！！！！

何処で手に入れたのでしょうか？

目線のあわない写真が多い事から盗撮と思って良いでしょう。

「癖のある茶色い髪の毛。アーモンド形のクリツとした瞳。とろける様な愛らしい笑顔！！頬ずりしたくなるほっぺ！　何でココまでも可愛いんだ！！　ああ……私の天使く」

大変痛い方が目の前に居ます。

今年で32歳となる方です。太い眉毛と凛々しいお顔。男らしくガツシリとした体は社内の男性社員から憧れる体と言われています。ええ…コレが社長の病気です。世間で言う‘シヨタコン’と呼ばれるもので御座います。

普段は仕事が出来、相手の事を気を使うことの出来る優しく素晴らしい方なのですけど。

困った方です。

「……いいかげん結婚してお子様でもおつくりになったら如何ですか？」

そうしたら親馬鹿ですむ話になるのですけど。

「私の家族を見ろ！！！」

そう言っただけ家族写真を見せます。

「よく知っておりますが？」

なんせ家族ぐるみのお付き合いですから。

「なら分かるだろう！！！！ 恐ろしいDNAを！！！！ 可愛い母に誰一人似る事の無いゴツツイ一族！たとえ結婚して子供が出来ても絶対に私に似る！」

「貴方の赤ん坊姿は整った顔だと看護婦の中で大変好評でしたか？」

「私は可愛いのが好きだ！！！」

そう言っただけ再び画面を少年の映像に変更。そのまま画面に頬擦り……。

……視界の暴力っただけこういう事を言うのでしょうか。私は視線を逸らしました。

「田中！」

「はい」

社長が私の名前を呼びます。とても嫌な予感がして逃げたいのですが……。

「この子に会いたい」

「……………はい」

こうして私は少年を調べる事になりました。

少年の写真を一枚コピーして調べる事となったのですが……。どう考えても犯罪ですよ……。

しかしほっとくと、社長本人が動いて更に状況は悪化します。ええ。私のすべき事は社長のアホ……………いえ、失礼しました。ご病気を悪

化させない事で御座います。

「どこかで見たことがある顔ですね……?」
「どこででしょうか？」

写真の少年は3歳ぐらいの少年です。

「田中さん」

「はい。何でしょうか？」

手に書類の持った部下が私を呼び止めました。

「この書類なんですけど……」

「ああ。わざわざ持ってきてくださいます有難う御座います」
そう言つて受け取るうとして写真を落としてしまった私。
あ……。

「? 落としましたよ……あれ?」

落とした写真を素早く拾った部下は写真に写ってる人物を見て首をかしげたのです。

知っているのでしょうか？」

「何ですか？」

「あ……その。これって開発部の課長の子供ですよね?」
そう言つて拾つた写真を書類と一緒に私に渡しました。

開発部…の課長…。

「似てますね」

「……」

あの男ですか……。

どおりで見覚えがあるはずですが。
自然と眉間にしわがよります。

「どうしたんですか？」

「あつ……いえ、少々考え事をしてまして……すみません。では」
私は早足でその場を去りました。

開発部の課長で名は雨中春斗と言います。

この男とは育児休暇でもめたのです！！！！

私はこの男に対していい感情は持ち合わせておりません。

彼の噂は色々と聞いていました。何処までが嘘で本当なのか、どれ
も怪しかったです。

年に6回ある社内勉強と言う名の工場見学で、彼は見ただけで機械
の良し悪しを理解し、人の制止を無視し勝手に機械を改造したそう
です。その後その機械は品質・生産量を共に10パーセントアップ
させたと言います。しかもその改造時間は10分もかからなかった
らしいです。

顔と体がモデル以上に整っており、何年経っても変わらないと言わ
れているそうです。

彼の開発した商品は必ずヒット商品となると言われているそうです。
彼は変わり者だと言われています。これは事実ですね。

他にも色々ありますが、私から言わせると目的の為に手段を選ばな
い危険人物です。

「はあ……」

思わず深い溜息が出ます。

あの男の子供に目を付けるとは……。とてつもなくやっかいです。
社長には適当に誤魔化す事にしましょう。そのほうが平和です。

男の育児休暇のある会社は珍しいです。

この会社は玩具会社なので会社の方針でしっかりと存在してます。
勿論使う方もいます。

まあ、社長が子供好きなので、子供が寂しい思いをするのは嫌だ、
と言う理由でそこら辺がしっかりとしているのは秘密ですが。

で、育児休暇は出産予定日の1ヶ月前から出産後の2ヶ月の計3ヶ月となつています。社長は「もっとあつても」とか言っておりましたがこれ以上は無理です。ええ。幹部連中のお子様は成人なさっている方ばかりですから。それに……社内恋愛で結婚で出産となりますと正直な話、人手不足となつてしまいます。

で、あの男ですが……その育児休暇を6ヶ月欲しいと言ってきたのです。

初めは部長とのやり取りだったのですが最終的に私のところまでやってきました。

開発部の部長は大泣きで「止めてくれ」との事。開発部の人間が一度に2名も長期休暇です。しかも課長です。課長が6ヶ月も休暇すると、仕事が回らなくなる可能性が非常に高いです。

頭が痛くなる話です。

どうなつたかと言うと……早い話、育児休暇6ヶ月をもぎ取られました。そんな前例を作ると後々面倒で嫌なのですが……あの男、人の弱みを見事握つてたのです！ 私だけでなく幹部連中の弱みもたつぷりと。

何なんですか！！！

「あの……」

「何ですか？」

渡された書類をディスクの上に置きながら聞きます。

が、なかなか喋ろうとしません。

……言いにくい顔ですね。何ですか？ 再び厄介事が舞い込んでくるのですか？ ……迷惑です。

部下は決意したように一度深呼吸をすると、

「開発部の雨中課長がお見えです!!」

言い切りました。

「……………」

眩暈がします。

思わず私はよろけてディスクに手をつきました。

「……………大丈夫ですか?」

あの男ともめた事を知っているので氣遣われてます。情けないです

……………。

「……………ええ。大丈夫です。隣の応対室に居るのですか?」

「はい……………」

……………行つて来ます。

胃がきりきりします。……………私の胃は持つのでしょうか?

応対室には優雅にソファ―に座る男がいました。

……………ええ、あの男です。

雨中春斗は入ってきた私に気付くと笑顔になりました。その瞬間、私の背筋は寒くなりました。

私はきゅっと身を引き締めます。

……………頑張りましょう。

「久しぶり……………」

ええ。久しぶりに見た顔です。出来れば二度と見たくありませんでした。

この笑顔が癪に障ります。

「……………お待たせいたしました。何の御用でしょうか?」

育児休暇中で後2ヶ月はあるはずですが?

何でココに居るのでしょうか?

「君のとこの困ったチャン相変わらずだね……………」

「？」

何のことでしょうか？

「ふふふ。君の弱みとでも言えば分かるかな？」

「！」

私の弱み……それは社長の事です。

社長が悪さをするのでその後処理するのが私の仕事になってます。

嫌ですけど。

…また何かやったのですか…？

まさか…

「最近、僕の家をうろつろしてるんだよね。危ないから避難中なんだけど……どうにかなんない？」

既に社長本人が動いていたようです。

あの写真は自らの手で撮影したものだっただけです。

手遅れ……とはこの事を言うのでしょうか。本当に事態を悪化させる人です。

‘会いたい’から調べるとは……こういう事だったのですね……。ばれて逃げられたって事です……。

あのアホがああああ……！！

「申し訳ありません……」

私は深々と頭を下げました。

「尾行に盗撮に徘徊。ストーカーって言うものだよね」

頭が痛い……。

顔を上げると男と目が合いました。

「会社潰していい？」

「っ！」

声の質が変わると共に表情をガラツと変えます。鋭い目に私の体が動かなくなります。

「……」

「ふふふ。冗談だよ」じゃ、頼んだからね！」

男は私に封筒を渡して立ち去りました。スキップなところが癪にさ
わりますが。

さっさと視界から消えてくれたので良しとしましょう。

「……………」

私はソファーに深々と座りました。

あの目は冗談で言う目じゃない……………。

あの男なら会社を潰すのは簡単な事なのでしょう……………。
なんせ多くの方の弱みを握っている方ですから。

誰か塩持って来て下さい……………。

「はあ……………」

溜息をつきながら私は渡された封筒の中身を確認します。

その封筒の中には社長の行いが事細かく載っていたのです……………。

あの社長をどうにかしてください……！！

しばらく私は頭を抱えたのは言うまでもありません。

田中　ゝ悪夢ゝ（後書き）

すみません、久しぶりの更新です。
お待たせしました。

田中〱後悔〱

あのアホがああああ！！！！

社長を指してアホとは大変失礼な話ですが、許されることでしょうか。ええ。

何ですかこのイタイ行いの数々は！！！！

封筒の中に入っていた社長の行動。犯罪の証拠とも言われるものです。すね。

ゴミまであさったのかっつ！

しかも侵入失敗の写真まで！！！！失敗で済まされて良かったですよ！

久々に切れました。

ボタン！

私は勢い良く社長室のドアを開けました。

「……田中さん？」

その音に振り向いた部下達は皆が驚いた顔になります。私の顔を見て顔色が青くなっていきますが気にしません。それと頃じゃありませんから。

室内を見渡すと、体形の良い目立つ男の姿が無い事に気が付きました。

……先程までいたはずの社長が居ない。
どういうことでしょうか？

この怒りをぶつける……いえ、説教する相手がいません。

「……社長は？」

「先程部屋を出しましたが……社内見回りではないでしょうか？」

「……」

嫌な予感がします。

もしかしてあの男が来たことを知ったのでしょうか？

「……社長に雨中課長が訪ねて来た事を伝えましたか？」

「え？……はい。田中さんが何処にいるのか尋ねられたので……不味かったですか？」

「……」

余計な事を……

そう思ってしまったのは仕方が無いですよ？

「……」

いやいや、ここで落ち着かないといけません。大変な事になりそうな気がします。

私は深呼吸をして気持ちを落ち着かせました。

ある意味真っ直ぐで素直な社長はとても迷惑な事に、行動力が良いのです。少しは考えて止まってくればいいのと思う事が良くあります。

……社長は次にどんな行動をするのか……。

社長は、氣に入った少年の居場所が分からないので私に依頼しました。

あの証拠写真からして親を知っていたにも関わらず社長は私に黙っていました。

その少年の親が訪ねて来ました。

「……」

結果……。――。

……社長ならチャンスと思うはずですが。

‘居場所の分からなくなった少年を見つけられる’、と思うはずで

す！！！！

「……社長を探します」

社長が馬鹿行動をして、あの男の逆鱗に触れそうです。
それだけは避けなくては！！！！

私は腕時計で今の時間を確認すると、男が立ち去ってから最低でも
10分は経っている事を知りました。

…封筒の中身を確認している場合じゃなかったです……。

「直ちに雨中課長の名簿を出してください！！ 後、社内放送を使
って社長を呼び出してください。…手の空いているものは社内を探
してください！」

そう、部下達に指示を出します。仕事？ そんな事は後回しです。

「はいっ！！！」

社長の携帯に電話をかけるが、何度かけても繋がりません。
くそっ！！！！

「田中さん！」

「何ですか？」

「先程、社内を見回り中の高羽から連絡がありました。社長の車が
社内にあつたそうです」

社長の車は駐車場に有ると言う事は…まだ社長は社内には？

……いえ、それは無いと思ったほうが良いでしょう。

社内放送をかけたのにもかかわらず反応が無い事から、徒歩又はタ
クシーを利用して外を出たと考えた方が良いでしょう。

「…そうですか…」

…手遅れか？

いえ、諦めてはいけません！！

「名簿がありました！」

部下が名簿を私の元を持ってきます。

「有難う御座います」

部下から受け取った名簿からあの男の連絡先を調べ、あの男に電話をかける。

……繋がりません。

こんな時に！！

「っ！！！」

あの男の家に行って捕獲……は無理です。確か避難中と言ってました。私はどこに避難したかしりません。

「！」

そう言えば！

携帯のGPS機能を使えば社長の居場所が分かるかもしれません！
普段使わない機能なので忘れてました。

「GPS機能を使って社長の居場所を割り出してください！」

「はいっ！」

後は心当たりを片っ端から電話をするしか有りません。

「ダメです！ 携帯電話の電源が切られているみたいです！」

「では、この手帳に載っている電話番号に連絡してください」

「……幹部の方々もですか？」

「……腹を探られると厄介ですが仕方ありません。あの男が社内顔を出した」と言えば黙るでしょう」

「黙りますね…確実に」

その結果、社長は自宅に帰っていることが判明したのです。

『あゝ…探しちゃった？ ごめんね。取引先の所に顔出してから帰ったんだ。一応田中に連絡しようと思ったんだけど…携帯の充電切れちゃったんだ』

「伝言でも良かったと思うのですが？」

『あははは。ごめん。今度はそうするよ』

と、自宅の固定電話に出た社長との会話です。ここで間抜けな会話だなとかは、言うてはいけません。

まあ、居場所が分かったのでホッとしたので良しとしましょう。

あの男と一緒にいるわけじゃなさそうですし。

「……帰宅なさっていたみたいですね」

「そうですね。皆様ご協力、大変有難うございました。」

そう部下に頭を下げ、通常勤務に戻ってもらいました。

それが、後に後悔する事になるとは…思ってもみませんでした。

田中〱後悔〱（後書き）

苦勞してるなあ…田中さん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3124k/>

タマゴ奮闘中！

2011年10月10日10時26分発行